

コメント③

大災害時のイメージの共有と人のネットワークのあり方

奥村 弘

一九九五年に史料ネット〔歴史資料保全情報ネットワーク、九六年に現在の歴史資料ネットワークに改組〕ができてからいろいろな活動を続けてきて、今日はその観点から、大災害時の中で何ができるのかということや、イメージの共有がとても大事だということ、もう一つは、これは先ほど今津さんも言われましたが、人のネットワークについて話したいと思います。

## 大災害時のイメージの共有

まず、大災害時をどれだけイメージするかが大事です。イメージしなければならぬと思っっているのは、放射能被ばくの問題は別として、大規模な地震であったとしても、大水害であったとしても、全部がやられる、全部が壊れる、全部の人が死んでしまうということはありません。被災地の状況はそれぞれまだらで、そこにはできることやできないことが起こるということを知っていただきたいと思っています。

例えば大災害時の大地震の想定で、十何万人死ぬなどという話が出てきます。そうすると、「そんなに死ぬのだったら、やつても仕方ないな」とか、私たちが災害時に資料保存をするときも、やれることは本当に小さなことで、全部を何かできるということは当然あり得ないわけです。本当に一部ができるだけです。これは単純に歴史資料だけではないのですが、災害時の中でできることをやろうではないかということがとても大事ではないかと思っています。できないことは仕方がないということの裏返しにもなるのですが、全部を引き受けるといふ発想をすると、とても疲れてしまつて続かないということになるので、そこはとても大事だと思います。やれることをやっつていこうとい

うことになる、先ほどの今津さんのように何度もチャレンジを繰り返して、それなりに次々と新しいことが展開できるということになってくると思います。ですから、今回、東海〔資料〕ネットをつくられるときに、まずは大災害が起こるということの中でやれることをやっていく。そのことの中で、どういう形でネットをつくっていくのかという点を考えていただければと思います。

もう一つ、大災害時に起こることとして、特に〔阪神・淡路大震災のときの〕神戸の場合はそうでしたが、もし大都市部に直下型地震や大水害が起こったら、そこは動けなくなるということです。神戸の場合も、私や、今日も来ておられますが藤田さん〔藤田明良氏、現在、歴史資料ネットワーク副代表、天理大学教授〕が動きました。藤田さんは家は全壊しましたが、すぐに被災地から引き上げて京都の方に避難したため、私は当時大阪に住んでいたもので、動けたのです。神戸市内の人たちはまず動けない、ということになります。今回、齋藤善之さんが言われましたが、東日本大震災の際の仙台も同様でした。

また、災害の中で自分の命を守っていくということも含めて、全体としては、皆が同じように動けるわけではありません。ですから、いろいろな方が、可能性のある方が外や内からいろいろな形で活動するということです。一般的な秩序だった形で上から下へいくとか、ボトムアップでこういうことで、とは必ずしもならない。その場、その現状にしたがって、関係する人たちが緩やかにネットワーク型に動いていくということではないかと思えます。各地で資料「ネットワーク」というように名前を付けたのも、そういう点にあつたかと思えます。ですから、大災害時の場合にはそれほど計画通りにもいかないし、秩序だつてもいないことも起こりますが、その場で考えながら展開できるように緩やかな結合というのはとても大事ではないかと思つていきます。

## 人のネットワークのあり方

もう一つは人のネットワークです。人のネットワークに関しては、決してゼロからスタートしているわけではないということです。これは阪神・淡路大震災の時もそうですが、阪神の場合は直前にあった、例えば裁判資料の保存運動など、関西の学会の運動が前提にあります。そういうものの前提の上に、もつと古いさまざまな保存運動に関われた方々の活動の上に存在しています。斎藤善之さんも、被災地の中にいるさまざまな史料保存されている方と、ずつと長い間のお付き合いがあつたりします。私たちの活動はゼロからではなくて、東海などは特にそうだと思いますのですが、さまざまな深い人の関係が既に出発上がつている中で、それを生かしながらネットワーク化していく。そこにとっても大事な点があるのではないかと考えています。

それは、ある意味では神戸の史料ネット（歴史資料ネットワーク）と似ているところがあるのではないかと思えます。神戸の史料ネットは、実際には京阪神の日本史研究会や大阪歴史学会、大阪歴史科学協議会などの学会と、兵庫県のさまざまな市民がやっている学会も含めた、学会の協同組織でもあるという側面を持っています。これは他のネットと違った特殊性でもあるのですが、活動としては実質的に京阪神全体に広がっています。これは対する活動なども当然おこなっています。そこは歴史学の学会の方々の力の上に成り立っている。特に若い委員の方は、大体それぞれの大学から委員になつていただいているので、その方が次の就職先で提言し、場合によっては他の県や全国の就職先で活動していくということになります。そういう継続性という意味で言うと、地域には大学レベルの学会もあるし、地元の郷土史家などによるさまざまな学会があります。後者は弱まってきているのですが、

その維持の必要性も含めて、そういう点を重視していただけたらいいのではないかとも思っています。

また、神戸のネットワークは、全体はボランティア組織であるとともに、学会連合でもあるという二重の性格を持つていて、特に若い研究者の皆さんや学生さんがここに参加していただいて、とても重要な役割を果たしているという点があります。その意味で大学の役割は大きくて、全体としては日本各地の大学が主要なネットワークを支える形の仕事をしていただけだと非常にありがたいと思っています。長い間、各地の大学は、その地域の歴史・文化を支えるさまざまな人々と連携する役割を果たしてきましたが、今はそういった大学の歴史・文化系の教員等の数が減らされていたりして大変なことになっており、それでは地域がもたないのではないか。広く見れば私たちの活動というのは、地域の歴史・文化の継承や、それをより深めていくための活動の一部でもあると考えています。

今回のフォーラムには、科研（科研費特別推進研究「地域歴史資料学を基軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者・奥村弘）研究グループ）の形での共催もさせていただいています。危機の時代で地域の歴史・文化の継承が非常に難しくなっていく中で、それをどのように支えていくのかという点も共有していくと、さまざまな人のネットワークが広がるのではないかと思います。そういう点でネットワークを広げていけるようなスタイルを取る形で、いろいろな地域の新しい実践が出てきますと、私たちもまたそれを学ばせていただいで、これを考えていけるのではないかと思っています。また今後も、そういう点で長くお付き合いいただければありがたいと思っています。

（おくむら・ひろし 歴史資料ネットワーク、神戸大学大学院人文学研究科）